

受賞作品

サービス産業の生産性分析 —マイクロデータによる実証

森川正之著

日本評論社 viii,312 ページ、6000 円（税別）



書評

市場の新陳代謝を提言

慶応義塾大学教授 樋口美雄

これまでその重要性が声高に叫ばれながら、日本のサービス産業の生産性について、真正面から切り込んだ書物はほとんどなかった。そもそも分析しようにも、分析の手掛かりとなるデータが存在しなかった、正確に言うと、基礎となるデータが未整備だったからである。

そうした中、著者は莫大な時間と労力を投じ、政府統計の基礎となるマイクロデータを使って企業ごとに連結した 10 年間にわたるパネルデータを独自に作成。それを用いて分析を行った。

サービス産業はその時間的・空間的特性から他産業に比べ、需要行動の影響を強く受けやすく、企業による生産性の格差が大きいことが知られている。このため、平均値データからは有意義な示唆を得ることはできず、企業間・事業所間のばらつきを示したマイクロデータの活用がむしろ有効となる。

そうしたサービス産業の特性にも配慮した、著者独自の考え抜いた分析手法を採用することで、日本に限らず世界の多くの国でもサービス産業の生産性上昇率は製造業に比べて低いこと、サービス産業には生産性の高い企業も多数存在するものの、非効率な企業が市場から退出しておらず、全体としての平均生産性が低くなっていること、従って市場の新陳代謝を進めることで、サービス産業の生産性の引き上げが十分可能であることを著者は明らかにしている。

また、小売業・卸売業では集積の経済効果が働き、都市規模や人口密度と生産性は強い相関関係にあることから、コンパクトシティの形成などを通じた空間的な「選択と集中」こそが、サービス産業の生産性を引き上げるのには有効であると指摘。さらに、需要の変動を平準化し、それに応じて非正規労働者を活用している企業ほど、生産性が高いことも示している。

いずれも緻密なデータによって裏付けられた奥深い分析だけに、著者の主張には大いに説得力がある。とりわけサービス産業の生産性引き上げには、個別企業の生産性向上だけではなく、企業の新陳代謝の促進など、産業政策的な対応が強く求められるとの指摘は、誠に重要であると言えよう。それも単なる産業政策にとどまらない、国民の生活を考えた幅広い対策が求められていることを、客観的データに基づき、本書が示したことは、特筆に値する。